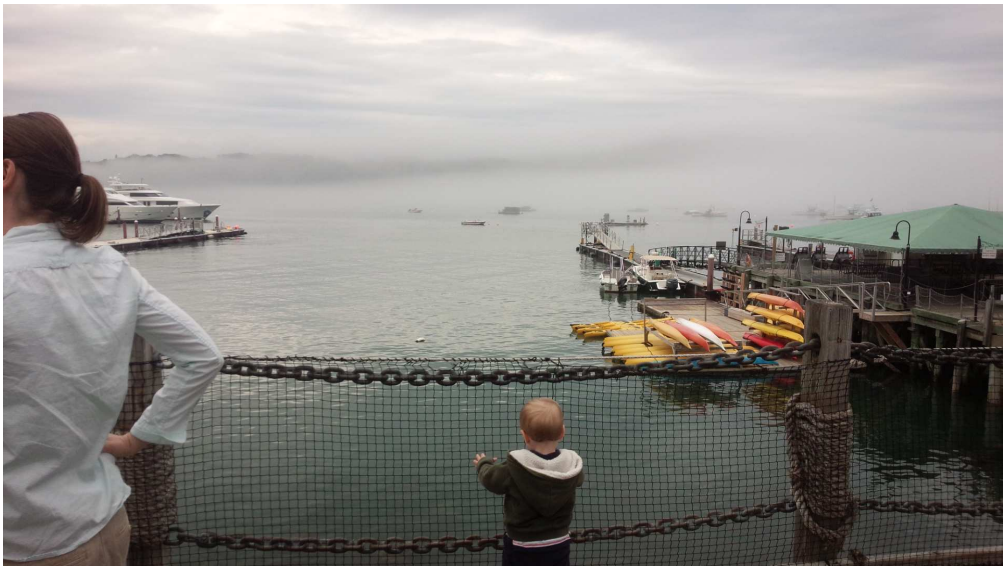
画文集『旅の空の下で』Ⅸ

－Photo Essay　2015－

イタリア・ミラノ大聖堂のファサード　／　米国メイン州バーハーバーの夏



2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅 1

9.11 メモリアル

昨夏、アメリカ北東部とカナダのケベック州や大西洋岸を回る旅に出た。最初に寄ったのはニューヨーク市だった。2001 年の 9 月 11 日、世界を震撼(しんかん)させた同時多発テロが起きた、その現場を再訪した。あの年の 12 月末にも、事件現場を見に行ったことがあるからだ。当時はすべてに治安優先で、封鎖地点には警官と銃をもつ兵士が立つものものしさだった。おかげで解体中の現場には近づけず、遠巻きにして見るだけだった。

ワールド･トレード･センター(WTC)の二棟の建物跡には、その方形が沈んだ形で池が造られ、周りから水が流れ落ちるモニュメントとなっている。ご覧の通り、縁石には犠牲者の名前が刻まれ、それを見つめる訪問者がいつも絶えない。敷地内には今年、ニューヨーク市で一番高い WTC 1 が再建された。その高さ 541m は、1776 フィート。アメリカの独立年を表す。世紀を越えてアメリカの象徴となった。

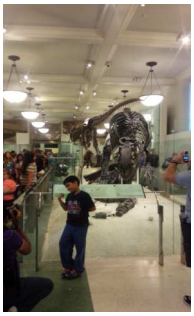
2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅 2

モーガンの図書館

この時すでに、ニューヨーク訪問は五度目で、主な観光地は回っていた。今回は違う所にと言うことで訪れたのは、マディソン街 37 丁目にある資産家モーガンの邸宅跡。今は併設(へいせつ)の美術館とともに、その書斎が公開されている。

ジョン･ピアモント･モーガンは実業家の家に生まれ、学問に優れドイツの大学にも籍を置いた。父の事業を引き受け 19 世紀後半、アメリカでの鉄道事業で財産をたくわえ、20 世紀の初めにはアメリカ一の金融会社を経営した。その名は、現在の投資銀行「モーガン=スタンレー」に受け継がれている。

読書家でもあった彼が残した蔵書が、この小さな体育館のような規模の図書館に収められている。頭上の豪華な天井画に圧倒されたが、三層の書棚に並ぶ書籍も貴重な初版本が殆どで贅沢(ぜいたく)に限りはない。こんなブルジョア(大金持ち)がいるのも、いかにもアメリカらしい。



2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅３

アメリカ自然史博物館

映画『ナイトミュージアム』で有名な自然史博物館に来た。肉食恐竜？を背にして、少年はご満悦だ。膨大な博物資料と展示物をもつ館内は、一日中歩いてもすべてのコーナーを見られないほど大きい。この日も遠足でたくさんの小学生が来ていたが、持参の弁当を食べるための大きな食堂まで用意されている。

恐竜もさることながら、北アメリカに生息する大型獣のコーナーは、そのはく製が迫力満点で、大きさに圧倒された。また世界史関連の展示では、生まれて初めてペルシアのゾロアスター教の祭司の服や、儀式用の器などを見ることができた。

こうした貪欲な博物への好奇心を抱き博物館の発展に貢献したのが、第 26 代大統領のセオドア=ルーズヴェルトだ。映画でカウボーイ･ハットをかぶり馬上に座るあのおじさんだ。今回の旅では、最後にポーツマス市を訪ねたが、何かとこの人と縁の多い旅になった。

2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅４

ハーウィットさん

ピンボケ写真だが、紹介しない訳には行かない。銀行でのハーウィットさんだ。

ボストンへは、ニューヨークのラ=ガーディア空港から 1 時間ごとのデルタ航空便を利用した。着いた空港でレンタカーを借り、市内には入らずカナダを目ざす。ところが最初の立ち寄り先セーラムの駐車場で、早速トラブル。そこが電気自動車の充電ブースと知らずに駐車したため違反となった。

困ったのは、支払方法がわからない点。午後も遅いので宿探しのため隣の海浜リゾート、マーブルヘッドまで来て、銀行に立ち寄った。窓口で聞いてみるとやはり大変。口座をもたないと、支払う術(すべ)がないと言う。どうしたらいい？

そこへ立ち寄った地元民のハーウィット氏が、「いいよ、私の口座で支払いましょう」と言ってくれた。言葉に甘え 20 ドルの現金を氏に支払って、一件落着。困っている人には、ためらわずに助け舟を出す。彼は典型的なアメリカ人だった。

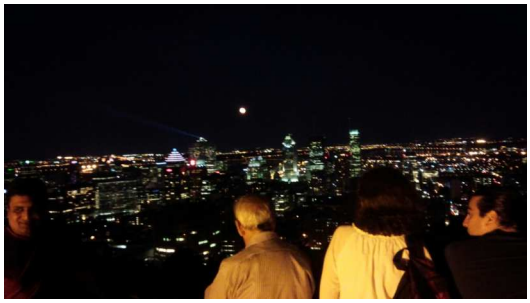
2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅５

カナダへ入る

マーブルヘッドのあるマサチューセッツ州からニューハンプシャー州をかすめ、緑濃いヴァーモント州を北上。途中、薪ストーブの工場に立ち寄った後、カナダ国境に近いシャンプレイン湖に達した。翌朝、ついにカナダの国境へと来た。有料道路のゲートに似て、何レーンにも別れて審査を待つ。ところが運悪く自分のレーンだけが、やたら遅い。その理由を後で知って苦笑した。

ゲートにいた係官は体格の良い大男だったが、肝(きも)はよほど小さいのか、まとわりつく蜜蜂に手を焼いていた。それで手続きが滞(とどこお)っていたのだ。だったら甘いものを食べなければよいのに、菓子を口に放り込んでいた。

国境を越えても道は一面麦畑が続く平野を行く。遠くにモントリオールの高層ビル群が小さく見えて来た。それが大きくなる頃セント･ローレンス川の橋を渡った。これから暫くフランス語圏を行く。



2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅６

モントリオールの夜景

モントリオール市は人口 330 万人で、フランス語圏ではパリに次ぐ大都市だ。ここでの宿泊先は市の中心にある丘モン･ロワイヤルの西麓、モントリオール大学の寄宿舎にした。地下鉄の駅に近く市内観光に便利だったし、何より低予算で済ますことができた。ロワイヤルの丘はかなり広く、大学だけでなく、霊園や冬はスケート場にもなる人工池などが分布していた。展望台からは眼下に旧市街を見下ろせるし、その先にはセント･ローレンス川が横たわっている。

夜、丘の駐車場に車を停め、夜道を展望台までたどる。大勢の人がいてなかなかフェンスの所まで行くのが大変だった。北緯 45 度のこの地は夏の白夜が続き、なかなか闇が訪れない。集う人々は中東のアラブ系と思われる家族や、アジア系と思しき団体がいたりして、とてもコスモポリタンな雰囲気だった。そうこうしていると、月が上がってきた。

2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅 7

プリンス・エドワード島の牡蠣

モントリオールからはセント･ローレンス川沿いを東へ下り、ケベックに宿泊した。さらに下り再び英語圏のニュー･ブランズウィック(NB)州に入る。針葉樹の森を切り開いたフリーウェイを走る。広大なカナダでは比較的小さい範囲だが、殆ど一日中、車を運転し続けた。

NB からは『赤毛のアン』の舞台、プリンス･エドワード(PEI)島をめざした。PEI へは長さ 13 ㎞のコンフェデレーション橋を往復した。海の上を行くようで気分が良かった。PEI でのお目当てはまさか少女文学の『アン』のはずもなく、この地で採れる牡蠣(かき)だった。牡蠣のためなら世界の果てまでもが、私のモットー。

写真の店カーズ･オイスター･バーは、島の北側『アン』に縁のキャベンディッシュに近い、海沿いの村にあった。ここで生牡蠣にレモン汁をかけて賞味した。

『アン』の舞台、グリーンゲーブルズには、この日も大勢の観光客が来ていた。

2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅 8

ハリファックスの港にて

大西洋に面したノヴァスコシアの州都ハリファックスは、大西洋に向き合う港街だ。写真は、港の桟橋から陸側を写したもの。ここは観光客が集う水辺で、楽しそうに散歩する人を見かけた。

近くには名所も多い。その一つ、海事博物館に入ってみた。この博物館の目玉は、ハリファックスが旅客船「タイタニック号」の犠牲者収容の歴史を刻んでいることだ。1912 年 4 月 14 日から 15 日にかけての深夜、「タイタニック」は北大西洋上で氷山と衝突した。その後海底へと沈み、1500 人もの犠牲を出す大惨事を引き起こした。現場は大陸から遠かったが、この街はその中では至近の港だった。事故の半月後、帰港する船からは、二百人近い犠牲者の遺体が陸揚げされた。それを一度に収容する施設がない。そこでカーリングを楽しむ競技場が臨時の仮置き場になったと言う。市の周辺には犠牲者の墓もあるそうだ。

2014 年夏　アメリカ・カナダへの旅 9

ポーツマス条約の地

ノヴァスコシアから一部フェリーも使い、再びアメリカに戻る。メイン州からさらに南下すると、ニューハンプシャーの海岸に、軍港として発展したポーツマスの街がある。

1905 年夏、日露戦争中の両国はアメリカ大統領ルーズヴェルトの仲介で講和会議をこの地ポーツマスでもった。その会談場は、海軍工廠(こうしょう)の中にありたやすくは入れない。しかし、両国の代表団が会議中滞在したリゾート・ホテル『ウェントワース・バイ・ザシー』は今も現役で、ピスタカタ河を挟み工廠と向き合うニュー・カッスル島に健在である。

日本側の全権は小村寿太郎。背が低く『子ネズミ大臣』などと揶揄されたが、才智に富む人物だった。小村と共にハーヴァード大学に学んだ金子堅太郎は、やはりその卒業生であるルーズヴェルトと連絡を取り合い、ロシア側との交渉をまとめるのに一役買ったと言う。

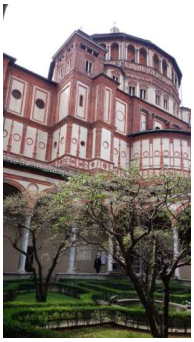
ロンバルディアへの旅 1

夕映えのミラノ大聖堂

2014 年 3 月末、6 日間で北イタリアのミラノとその周辺、ロンバルディア地方を巡る旅に出た。26 日夕刻、無事にミラノの都心、中央駅近くの安宿に到着。翌朝、地下鉄でミラノの都心と言われるドゥオモ広場に行ってみた。広場はいつ行っても人で一杯。世界中から観光客が詰めかけている。

その広場に偉容を放つのが、この大聖堂(ドゥオモ)。ミラノをヴィスコンティ家が支配した 14 世紀後半に着工。それから何と五百年近い歳月をかけ、1813 年に完成した。宗教改革期の工事中断が長かったという。

それにしても針のように林立する尖塔が目立つ。160 本以上あるそうだ。縦の線が強調されるので、様式としてはゴシックスタイルだが、決して塔頂まで高くない。このユニークな形はイタリア・ゴシックの特徴だそうだ。街中を一日歩き、夕刻再びドゥオモ広場に来てはっとした。ドゥオモの正面は西に向いており、そこを沈む夕日が照らしていた。金色に輝くドゥオモだった。



ロンバルディアへの旅２

『最後の晩餐』を見る

ミラノに来た一番の目的は、市内のサンタマリア・デッレ・グラツィエ教会にあるレオナルド=ダヴィンチの壁画『最後の晩餐』を見ることだった。この絵が簡単には見られない。日本出国前インターネットで予約するのだが、日が近づき枠が売り切れてしまった。ところがガイドブックに業者へ依頼という手が書いてあった。これでかろうじて、切符を事前購入。27 日の午前 11 時から 15 分間の入場が指定された。

『最後の…』は教会に付属する修道院の食堂の北端に描かれた壁画で、現在はこの食堂が鑑賞のためのギャラリーになっている。市内の高校生だという女生徒と引率の先生 10 人ほどと一緒に入場した。修復が終わったこともあり、本物の迫力にため息をついた。これが撮影禁止で、自分の写真で紹介できないのが残念だ。修道院の中庭は幾何学的にデザインされ、そこからは教会の丸屋根を見上げることができた。樹には若葉が茂っている。今年は春が早い。

ロンバルディアへの旅３

ｻﾝﾀﾏﾘｱ･ﾃﾞｯﾚ・ｸﾞﾗｯﾂｨｴ教会

外から見た教会。ミラノに健在の市電の線路が見える。建物はそれに沿って奥へと延びるが、15 世紀にミラノ公フランチェスコ=スフォルツァが造らせた教会が基になっている。これをスフォルツァ家の霊廟として改造を任されたのが、ドナト=ブラマンテ。ローマのサン=ピエトロ大聖堂の建築家で、ダヴィンチの先輩でもある。

『最後の…』は、この左手奥の修道院内にある。第二次大戦中の 1943 年 8 月、米軍による空爆が行われた。ムッソリーニのファシスト政権に打撃を与えるためだった。この時、教会も被災を免れず、辺り一面は火炎に包まれた。ダヴィンチの傑作は、絶対絶命！。しかし朝を迎えると、奇跡が起こっていた。教会に付属するドメニコ会の修道士が一計を案じ、絵画の前面に土嚢(どのう)をうず高く積み上げていた。食堂の西壁も残り、『最後の…』は奇跡的に生き残った。ダヴィンチの足跡を大事に保存する、ミラノ市民の思いが通じた事件だった。

ロンバルディアへの旅４

辻音楽師（ヴァイオリン弾き）

午後の一時、市中心部の北側を訪ねてみた。建てこんでいるが、繁華な雰囲気はなく街は静かだ。何となく高級そうな建物とガラスの玄関。横文字でジョルジョ=アルマーニとある。例の紳士服の会社の本部と思しき建物だった。さらに進むと、市内最古の教会があるという。サン=シンプリチャーノ教会。写真の奥に見える建物だ。中はカトリックの教会らしく、赤い蝋燭をささげる棚があり、炎がゆらめいていた。ドゥオモのような豪華絢爛さはないが、訪れる人もまばらで静かな落ち着いた空間だった。

外に出て、表通り(ガリバルディー通り)まで来ると、ご覧のとおりヴァイオリン弾きが軽快な音楽を奏でていた。曲はエンニオ=モリコーネの作品だ。一度通り過ぎるが、気分が高じて、歩道に置かれた楽器ケースにチャリン・・・。先ほど弾いていた、「映画『ミッション』のテーマ」をお願いした。なかなかの技量。街歩きの楽しみは、こういう辻音楽師などに出会えることにもある。

ロンバルディアへの旅５

16 本の列柱

都心の南部、トリノに向かうトリノ通りやその昔の城門ティチネーゼ門あたりには、古代ローマ時代に縁のあるものが多い。その界隈に、サン･ロレンツォ･マッジョーレ教会があった。教会前の広場は人々が集い、グループで踊る者、友人と談笑する人など楽しそうだった。この写真は、広場の反対側を写したもの。全部で 16 本の列柱が並んでいる。

イタリアは古代ローマ文明の地だ。ギリシア・ローマ文明に特徴的な大理石の円柱など、他の都市にも残るが、こちらのデザインは、柱の上部に装飾が施されたコリント式だ。ローマ時代のミラノはメディオラヌムと呼ばれ、4 世紀には第二の首都になるほど、繁栄した。

写真には出ていないが、広場には皇帝コンスタンティヌスの銅像が立っていた。この地でキリスト教を公認する勅令を発布し、名を残すことになった。と世界史の授業で教えている、その人だ。

ロンバルディアへの旅６

デセンツァーノ･デル･ガルダ

旅の３日目、ミラノを一旦離れ、列車でアルプスを望むガルダ湖へとやって来た。ヴェネツィア行の特急『フレッチャ・ビアンカ(白い矢)』は、ガルダ湖の玄関口デセンツァーノに停車する。その田舎の駅舎と列車を写したもの。これ以上は望めない快晴で、暖かい春の日だった。ご存知だろうか、欧州大陸の列車は低いホームからタラップを登り車両に入るのが普通だ。手前のホームが低いのがわかる。ちなみに駅の改札口もないので、送迎の人は自由にホームに出入りできる。改札は、列車内で抜き打ちで行われる。

駅は高台にあって、街は北側の湖沿いにある。そこまで下り坂を降りる。狭く曲がりくねった石畳の道を行くと、道が広くなり、そこから船溜まりが見えた。明るい陽光の下、湖水はエメラルドに輝き、遠くには未だ雪の残る山まで望まれた。入った観光案内所の女性に、思わず「美しい街ですね」と言ってみた。

ロンバルディアへの旅７

スカラ家の城砦

観光案内所で、これから向かう街への行き方を聞いた。ガルダ湖の真ん中に北に向かい、へびのように細い半島が突き出ている。古代ローマ以来の避暑地シルミオーネだ。そこには船でもバスでも行かれると聞いた。船で行きたいが、湖水は風が強く波立っていた。バスに乗って、その半島を行く。段々と左右に湖が迫ってくる。その昔、ヴェローナの領主スカラ家が築いた砦が街の玄関に立ちはだかっていた。ここからは、徒歩で街に入る。

跳ね橋を渡る時に気づいたが、街は半島ではなく島に立地していた。砦の中からは、観光客が階段を上下する靴音が聞こえて来た。こうなったら、砦に入場しない手はない。階段を上って、そこから見える絶景を堪能しよう。上ると人の良さそうな若いカップルがいて、写真を撮ってくれという。はるばるブラジルからだそうだ。ここにも私同様、海外からの観光客が集まっていた。

ロンバルディアへの旅８

シルミオーネの街

ご覧のとおり、街はガルダ湖に囲まれた島の上にある。遠くアルプスを望み、抜群の景勝地と言える。車の侵入を制限した街は、入り組んだ細い路地歩きが楽しい。街の奥、『テルメ』と書かれた所で引き返した。高級ホテルのたたずまいで、自分が場違いに思えたから。実は、この島に本当の温泉が湧いていた。古代ローマ時代のことだ。ローマ人がここを避暑地に選んだのは、その温泉目当てだったという。島の沖合には、わずかだが、今でも温泉が湧く所があるそうだ。

腹がへって来たので、レストランに入ることにした。ピッツェリアがあったのでそこで昼飯となった。食べたのは生ハムをごっそりのせたピッツァで、美味だった。ただ、これを平らげるには、量が大きい。残り物を入れる袋をもらい、残りを道中食べることにして、店を退出した。その足でバス停まで戻り、ヴェローナ行きのバスに乗った。

ロンバルディアへの旅９

マントヴァのドゥカーレ宮

ヴェローナ名物の古代劇場を訪ねた後、その足で向かったのは、ロンバルディア州の東南、平野の真ん中にたたずむマントヴァだった。街を囲む湖に沈む夕日を見ながら、列車はゆっくりとホームに滑り込んだ。駅前のホテルに入る。

マントヴァは、人口５万にも満たない小都市だが、マニエリスムとも呼ばれる後期ルネサンスの中心で、装飾美術にあふれていた。当時の公国の主、ゴンツァーガ家が集めたもので、中心はそのドゥカーレ宮殿だ。広くて間取りも複雑な宮殿内は、そのまま美術館となっていた。

写真の優雅な広間は、マントの間。ルネサンスの貴婦人と呼ばれた侯爵夫人、イザベラ＝デステの部屋だそうだ。どうして天井にも描かれたのかの答えは、フレスコ画。生乾きの漆喰が乾かぬ中に絵具で描いた技法だ。一旦乾くと、絵具が中まで浸透し、時を経ても色落ちがない。鮮やかな色彩が残るというわけだ。

ロンバルディアへの旅 10

結婚式に出会う

ドゥカーレ宮殿の前にはソルデッロ広場があり、街の中心となっている。向かいには、この街の聖堂(Duomo)が控えていた。こちらもマニエリスムの傑作だと言うのでのぞかないわけには行かない。

教会の正面(ファサードと言う)がそのマニエリスム様式だという。コリント式の石柱がレリーフのように左右に二本ずつ並び、頭上には三角屋根。ギリシア神殿風のユニークな外観と言えそうだ。インテリアも、天井にまでフレスコ画が描かれており、端正で色彩豊かだった。そんな堂内を歩いていると、何と若いカップルが結婚式を神父を囲んであげている。なぜか、参列者も長椅子に座らず、立ったままだ。CD プレイヤーをかける人がいて、今のはやりの曲なのかバラード風のカンツォーネが流れる。自然と感動！

その音楽に祝福されて、若いカップルは会堂を出て、一緒に出た参列者に米粒を当てられながら、キスをしていた。